

て、横山大觀氏と外二三氏を除いたら、多方はこんな風でわな
いでしようか。いや日本畫家ばかりではありません、お手近な
所にもそんな人達が澤山居わしないでしようか。

時計が十二時十五分前を指してゐます。私はもつといろく、
書きたく思つて居りましたが眼はさへてゐても頭が亂れます。
蟀谷が痛くなりました。さらば又次にしませう。(十二月九日夜)

秋季横濱支部展覽會を見る

K、Y、

拾一月の風は寒いが陽氣は小春日和の暖い十一日の午後港町
河岸の眞港館へ水彩畫研究所横濱支部の第二回水彩畫展覽會を
見に行つた暗い梯子を登つて三階へ上ると其處が會場だパット
眞ともに西目を受けた明るい室だ。は入つて右側から二段に成
つて會員の作が五十占許り並べて有る。自分はわづか許りの寸
暇を得て來たので唯ずらと一通見た丈けてそれに淺學な自分は
批評する力はないが覺へて居る丈の作品に對して自分の頭に感
じた事丈を書く。平田氏のは風景よりは靜物の花の方が色も形
も善ひ。高島氏は餘暇のない人にかゝわらず、つとめて善く出
ず人だ今年も七枚出して居る。秋晴、屋根の調子が少し弱くは
ないかその故か薄ぺらに見へる地面は面白いが樹木の葉の間か
ら空のすいて見へる處へ餘り白を使ひ過ぎて目ざわりだつた。
追分。は達筆で非常に面白く感じが出て居た同氏中の佳作だ山
手。コンボジーも悪く色の遠近もなく額から落ち相に見えた
芦の湖、誰も善く描く場所だが左の遠山はいくらスケッチでも
餘りぞんざい過ぎるそれに水も不透明で白粉の様だ。仙石原、
柿紅葉共に面白く思つた

鷹野さい子氏の靜物、二枚共唯描いた丈けて遠近なく物體の
反射なく未だく前途は遠い、遠藤宏氏の書齋背から下丸身

なく疊は硝子の如く窓の外の感じは作者の再考を用す不可解、
失禮だけれど未だ此んな物に手を下すのには早いと思つた、港。
餘りに飛び放れた調子で港の景としては廣い感じがしない森の
色は強すぎる台ヶ岳の裾、晚霞氏の石版畫を見る様な氣麗な畫
だが人物は少し色が強い様に思われた。夕の海、上半の感は出
て居るが下半は少し變だ小舟は無くもがなと思つた

淺雪は面白く見た、溪流同氏の佳作と思つた石の形など事
に面白く調子も善いと思つた谷、河原の石色は強過ぎはしない
か何んだか突び出して見えた八王子はスケッチなれど筆が軽く
て面白かつた、

田中氏は昨年と丸で描法が變つた様に思われたが自分は同氏
の先の描法が善い、今年のは悪いとは言はないが好不好から言
へばをとなし、昨年の描法が自分は好きだ極言すれば今度の
は茨木氏の眞似と思はれる悪口はよして雨の跡、輪廓の正しい
好い畫だが少し色が寒い鹽尻、中央の木の葉の赤いのは餘り調
子はずれてナレンヂの團子が成つて居る様だ。

せんきの湯、調子と輪廓は例に依つて正しいが何人だか未醒
か夢二のコマ畫を見る様だ小雨、小雨の感じは少し薄い道の描
法は餘りひねり過ぎはしまいか硝石板をつき合はした様だ甲州
駒ヶ岳、紫ぼい、はでな色の強い畫だ初め油畫かと思つた、甲
非駒色が嫌に強くて不快な畫だ、秋見はをちつきの有る調子の
好い畫だが右手の太い木はなくてもよいと思ふ四月、軽い筆で
氣持の好い畫だが雲は少し不自然と思ふ、雲の影水が不透明だ、
夕方の感じが更に出てない辨天通の邊てよく見る賣畫の様な感
じがした初夏スケッチとしては上午后の日遠山に強く日の當た

感じは好いが手前の石の色の冷たい色とは不調和のきらいがある、平野環氏の残照は調子の好いしめつぽい色の畫だが前景の草と材木は餘りに柔かくつて最少ししつかりした處がほしい又

中景の夕照の當つた家に鋭筆の輪廓が強く残つてゐるのは大變目ざわり注意すべき事だ、車はなくて好いと思ふ、他に吉田氏角田氏の作が三點宛出ていたが皆同じ様に調子の弱い畫で自分は此の様な人達の未來は望み多い事だと思つて参考室に入る満谷氏の油畫二枚出て居た、村の入口より四ツ手綱の調子も好いし感じがよいと思つた河合氏の油畫も有つたが皆取るにたらないスケッチ許りだつた、茨木氏の水彩は三枚出て居たが中でも驛路は殊に善い右手の家のカベの色など實に好い人物なんぞ活動して居る他の山中湖より本栖湖の方が感じが善い、吉田氏の春も秋も丁寧な畫だが自分は秋の方が善いと思つた、中川氏の伊豆海手前の松は少しどらだかと首をかしげさせるが中景の水から遠景の山はふるへつく様に善かつた、石井柏亭氏の伊太利の花賣娘は善く描いて有つた其外に故淺井忠氏の小品が二枚出て居たが皆な筆使いの氣色の善い畫だつた

終りに正面の床の間の前へくると其處に故大下先生の遺作が十數點先生の寫眞のまわりに並べて有つた自分は其處迄て來てかぎりない悲哀を感じ、しばし先生の事どもを思ひ出し、そして生けるが如き先生の面影を見てそゞろ今昔の感に絶えなかつた噫！先生は死んだ最ふ來年からの展覽會には先生の畫を見る事が出來ないのだ自分は唯々此の濃厚玉の如き先生を我が畫

壇より永久に奪ひ去つた無情なる天帝を恨む者の一人て有る自分分は此處に一句をつゞりて此の稿を終る

庭の木の一枝折れて秋の風、

手前味噲

談 湯 木

我々アマチュアの水彩畫作品にコンミツジョン付の批判評價は禁物である。面白づくで勞作するのであるから多少畫としては缺點批難の打處はあるに相違ないが、その氣品といふことを買つて戴きたい。赤裸々なる自然美と作者の人格が表現されてこそ立派なものである。私は畫家でないから下手ですの拙いもんですとの御世辭や遠慮は寸毫もいらぬ、斯道に造詣深いことを見て戴けばよいのである。どしどし黒人畫家をいぢめてやる程氣のよいものはない、先方も一生懸命此方も頗る眞面目である、こうなると面白づくもどうのこうのと云ふ問題はそつちのけにして、せつせと自然の肖像畫を抜きとつて終ふ。この觀念ほど我々アマチュアにとつて幸福な事はあつたらぬ。

我々は一枚のスケッチをやれば一枚仕上げねば氣が濟まぬ様に思ふ、高價なワットマンに對しても張込んだニューマン製繪具に對しても申譯がない様に思はれる。この濟まない事實が我々アマチュアにとりて、なかなか金錢に替へられぬもので、苦しい思ひが他の職業とはいささか趣を異にした觀がある。

アマチュアが展覽會を観ると自分の嗜好にまかせて作品を拜見して居る、時とすると早速その日の午後からスケッチ箱を荷